地元力発見！⑦

農民作家・遠山あきの思い出（上）

千葉県大多喜町・老川小学校のこと

筆者は、千葉県大多喜町の廃校になった旧老川小学校の校舎を借りて、2015年から3年間、地域活性化の取り組みをしていた。そこは、今回取り上げる千葉の作家、遠山あき（1917～2015）の誕生の地だった。当時、父親が同校の前身の老川尋常小学校の校長だった彼女は、学校の宿舎で生まれたのである。あきさんとは、いろいろ関わりがあった。「地元力」には、相応しい人物であると思い紹介しておきたい。

2008年から2年間、筆者は「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」という国交省の地域活性化事業を行っていた。房総横断鉄道とは、JR外房線大原駅を起点として大多喜城で知られる大多喜駅を通り終点の上総中野駅までの「いすみ鉄道」と、この上総中野駅を同じく終点としてJR内房線五井駅を起点とする「小湊鉄道」の、2つの鉄道路線を呼ぶ。文字通り、千葉県の中央部を結び横断する観光鉄道としての魅力や利便性の向上を期待した愛称でもある。

老川小学校は、終点の上総中野駅が最寄り駅で、毎年11月の連休頃には紅葉見物で賑う養老渓谷への途中の高台にある。養老渓谷には温泉と滝があり観光先となっている。この地域を学区とする老川小学校は、1962～3年ごろの最盛時には400人もいた生徒数が最後には34人となり、2013年3月で廃校になった。

廃校となった老川小学校の校舎は、先進的環境デザインの木造建築で、2000年に改築され、千葉県建築文化賞や文部科学大臣奨励賞も受賞していた。この校舎に魅力を感じて筆者は、efco.jpという一般社団法人を設立し、活性化事業を行っていた。校長室には、「養源園碑」の拓本が掲示してあった。碑銘は、大正時代に老川尋常小学校の教職員と生徒が、協力して学園を育て養う源としての園庭を作り、仲睦まじくあることを誓うために、名付けたものという。校庭には、「養源園碑」の石碑（**写真1**）があり、この文字を揮毫したのが、あきさんの実父の山口内蔵助校長であった。

写真1　老川小学校の校庭に立つ「養源園碑」

観察眼と慈愛に満ちた遠山文学

あきさんは、この父親の影響を受け千葉県立千葉女子師範学校（千葉大学教育学部の前身）を卒業し、教員となった。敗戦3年後に教職をやめ、農家に嫁ぎ慣れない農作業に従事した。1967年に農民文学会に入り、農業の傍ら文筆活動を始めた。1976年には、『旅立ちの朝』で千葉文学賞入選、1978年には、『雪あかり』で同賞受賞、1980年には、『鷺谷』で農民文学賞受賞と『絆』で千葉文学賞入選を果たしている。

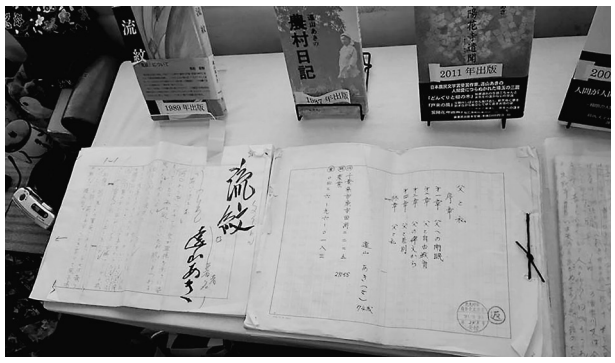

写真2　代表作『小湊鉄道のあけぼの（流紋）』の原稿

1978年からは、選考委員らとともに地域文学の発展と作品発表の場として、受賞者や入選者からなる「槙の会」を結成し、以来、同人誌『槙』に連続投稿、40作以上を掲載発表している。まさに継続は力なりの実践であり、前時代的な農業労働の過酷さへの女性の反骨を表現している。けれどもそれは、単なる旧弊に対する憎悪・反抗の表現に止まるのではなく、父親が実践した自由教育の視点と観察に根差した教育的な作風であった。結果、千葉県の、房総の文学界に大きなエフェクトを及ぼしたと言える。

遠山文学は、調査と観察、そして慈愛に満ちた表現で、時代状況や当時の様子を克明に記述した郷土史文学でもある。

特に、小湊鉄道沿線界隈については、あきさんならではの観察眼と郷土愛（**写真2**）にあふれる作品が多い。

写真3　遠山あきさん

あきさんは、今から5年前、2015年10月28日に98歳で亡くなった。翌年、あきさんが半生を住んだ市原市は、市原市特別市民栄誉賞の第1号を授与した。同年は追悼映画会や展示会が開催された。実は筆者は、同氏とは個人的な関わりもあり（**写真3**）、特別な思いもあるが、詳しくは、続編で述べることにしたい。

佐藤建吉　「洸楓座」代表

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事